隼人族の森を渡る風

創造の現場から　第40回

森の彫刻家　上床利秋

ミケランジェロの遺作
ロンダニーニのピエタは未完成なのか(3)

かつて鹿児島大学彫塑研究室で開催されていた「ミケランジェロ祭」と銘打った忘年会。それを当時の学生たちが恩師中村晋也先生のもとに集まりひさしぶりの開催。その中で標題のテーマを私が発表することになった。

ロンダニーニのピエタ
(1564年)89歳の作

前号の掲載写真が不明瞭となっていましたので
再掲載致しました。

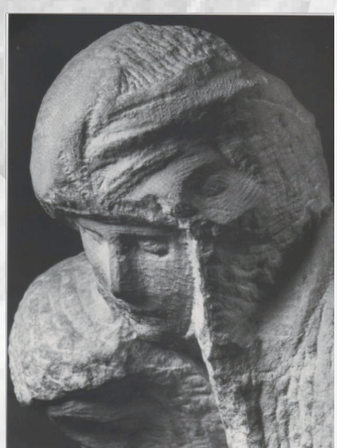
ロンダニーニのピエタとは

ミケランジェロの心の内は三百を超える彼のソネット(詩)を読み解くことで推測することができる。そこから、彼の考える正しい生き方とは常に神様とともにあり、質素であること、正直に生きることなど、とてもストイックに生活することを良としていることがわかる。その心情は彼が61歳の時に出会った未亡人の女流詩人ヴィットリア　コロンナに宛てた手紙に書かれたソネットからも読み取れるが内容は恋文とは程遠く、まるで牧師さんに書いているようにも思えるのである。

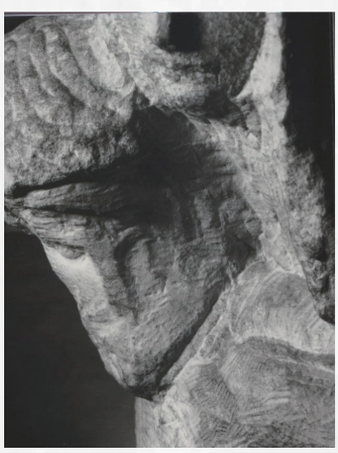
ロンダニーニのピエタは巨大な作品としてほぼ完成させていながら、87歳で作品のコンセプトまでも切り替える段階を経て、現在のかたちとして遺された。

初期段階のコンセプトを部分的にわざと残したのは、依頼制作をこれで遺作としたくなかったのではないか。最後の仕事は、自分のための仕事として残したかったのだろう。最後の日々を自宅で独り言を言うように、そしてそれは自分自身のやすらぎを得るようにいまのかたちを彫り進めており静寂な温かみを持った質素な表現となっている。それは,何故生きる、何故彫るというまるで禅問答に対する彼の最終的な答えのようでもある。

それは自分の肉体が滅んだ後に、神様にその理由を説明するための裏付けとして残したのではないか?



ロンダニーニのピエタ
(聖母マリア像のアップ)
アウレリオ・アメンドラ写真集より
聖母マリア像の額には第二段階で彫られたマリアの顔が残されている。



ロンダニーニのピエタ
(キリスト像のアップ)
アウレリオ・アメンドラ写真集より
キリスト像の頭部も第二段階で彫られた額と髪が残され、第三段階ではミケランジェロ自身の顔のようにも感じさせられる。

最初の全体像が想像できるコンセプトの証拠として下半身と右腕を残し、

2度目の創作のコンセプトを聖母マリアと、キリストの頭部の一部を残し、

キリストの顔を最後には自分に彫り変えて現在に至ったと推測していくと、

この像はもはや誰のためのものでもない。自分のための神様に手土産としての最後の仕事だったように思えるのである。

多くの彫刻仲間たちが述べているように、このピエタは悲しみではなく、祝福と平安を表している。それはキリストでもあり、ミケランジェロ自身に対してでもあった。

最後に、この像の核心とも察せられるべき彼の詩の一部を標記してペンを置く。

一体いかなる鋭きやすりにて、一刻一刻が、汝のくたびれし一巻を削り、すり減らしおるか。
衰えし魂よ。いまこそ、汝がために時があの鑿もて消し去られるべきとき、
かくて汝がかつてありしところ、天国へと還るべき時。
神への敬慕、その前に隠すまじ、われつとに死者を羨みつつあるを、
わが魂、われとともにひとりでに震えおののくほどに、うろたえ、混乱してはいても。
おお主よ。いまわの際に、わがために、憐れみの御手を差し伸べられ給え、
わが肉体より霊を連れ去りて、主の御意に嘉納させ給え。

日展会員　第一幼児教育短期大学　教授

この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

ホームページ刷新しました。
https://douzou.jp/
上床利秋　検索
このページのバックナンバーも読むことができます。